
むべやまかぜをあらしというらむ

楊青蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

むべやまかぜをあらしというらむ

【Nコード】

N4693F

【作者名】

楊青蓮

【あらすじ】

新人検非違使の宇津智成（14）は、なぜか今を時めく右近衛府大将藤原頼長に気に入られているため、たびたび仕事を強制欠勤させられ遊興に付き合わされている。秋めく保延5年の宇治。智成はまたもや呼び出されてしまった。

・其之零・（前書き）

平安末期に実在した藤原頼長の半生を、オリジナルキャラクターの
検非違使 宇津智成（14）の視点で描くことを目的としています。

ちなみに、頼長さまが両刀使いなのは史実です。なので、少しBL
風味です。

本作は史実を基にしたフィクションです。なので、史実と異なる部
分もあるかと思いますが、多めに見てやってください。

・其之零・

「ちょっと大尉殿、それは一体どういうことですか！」

時は平安末期保延年間、崇徳帝の御世の頃、終業間際の検非違使所けびいしに少年の怒号が響いた。

今日の分の書類をまとめていた案主たちが一斉に手を止め、声の方に振り向く。

「どうもこうも、上からのお達しなのだ。君は明日より出仕を止められた。」

大尉は少し困ったように眉をひそめる。少年はすっかり興奮してしまつて、顔を真っ赤にして言った。

「上からの？それは一体誰ですか。」

「…藤原頼長様……宇治の右大将殿だ。『小鹿殿に休暇を取らせ、右大将殿の休暇に付き合え』と。小鹿殿、これは名誉なことですぞ。」

大尉殿の言葉に少年は握り締めていた拳を緩める。

知らぬ間に寄っていた眉間の小じわもいつしか消えて、最後に彼はうつむいた。

「はぁ……右大将殿のお達しですか…承知いたしました。」

彼の返答を聞くと、大尉は立ち上がり、いつもの自室に戻っていた。まだ仕事があるのだ。

大尉がいなくなってしまうと、案主たちはひそひそと噂話を始める。ここの者たちは噂が好きなのであった。

少年の名は宇津智成と言った。

（先年急逝した左兵衛尉宇津智晴の嫡男で、天治元年（1124）生まれ。今年で十四になる。

この春より検非違使所（現代でいう警察のような機関）に府生として出仕し始めたばかりである。

人付き合いの嫌いな父に箱入りとして育てられたため非常に世間に疎く、色は白く整った顔立ちをして手足も細かったため、いつしか同僚たちからは『奥山の小鹿殿』というあだ名で呼ばれていた。

検非違使所で『小鹿殿』といえは智成の事を指し、それを知らないものはいなかったほど、検非違使所では異色の存在であった。

時は後に『院政期』と呼ばれる古代から中世への過渡期。

都は荒れ、寺社の強訴が相次ぎ、検非違使の仕事は多かった。

そんな中、ひょんなことから智成は今を時めく右近衛府大将 藤原頼長、通称『宇治の右大将殿』に見初められ、その舞人となるべく遅時きながらも舞の稽古を始め、その屋敷に通うようになったのであった。

さて今回のことであるが、つまり智成は右大将より直々に、強引な休暇のお誘いを頂いたということなのである。

「小鹿殿、また宇治の右大将殿からお誘いか？先月もそうだったよ
うな気がするが…」

府生仲間の春日利親が、自分の席に戻った智成に近付いてきた。

「ああ、甘条殿。」

智成はふと我に返って利親を見る。

利親も先輩から若輩者扱いされ、『甘条殿』という不名誉な通称を頂いている。智成とは同期である上、そんな共通点もあり比較的親しかった。

「なあ小鹿殿、いっそのこと宇治の右大将殿の家司でもやった方がいいんじゃないか？それとも、稚児とか…」

利親が意地の悪い顔をして智成を笑うと、智成は感情を隠さず明らかにムツとしてみせる。

「甘条殿！それは侮辱ですぞ…家司はともかく、稚児などとはっ！
私はもう元服も済ませて…」

「冗談だ。真に受けるなよ。」

苦笑した利親に、智成はふくれたままで、吐き捨てるように言った。

「甘条殿の冗談はいつも性質たちが悪すぎるのです。」

「で、今回も行くのか？」

利親は苦笑したまま智成を伺った。

「もちろんですよ。“今を時めく”右大将殿のお誘いを断ったら、私の首が危ういですから。」

「そりゃそうだな。まあがんばれや。」

利親はポンポン智成の肩を叩くのであった。

・其之巻・

あれから数日後の昼前のことである。

もちろん智成の姿は検非違使所にはない。彼は、宇治の知足院の館にいた。

知足院とは、かの藤原頼長の父君にあらせられる。落飾して知足院殿と呼ばれていたが元の名を忠実といった。

「頼長様…私はこのように聞こえてはおりませぬ。」

頼長の隣で控えていた智成は少々青ざめて、自分の主を見上げる。そんな智成を見て、頼長は評判の美しい顔に薄っすらと笑みを浮かべた。

「小鹿、私はそなたには十分教えることは教えたはずだぞ。大丈夫、そなたならできる。」

「しかし…どなたかは存じませぬが、私のような者にそのような高

貴な方のお相手…務まるわけがございませぬ。」

智成は頑なに首を激しく横に振る。

そんな智成を見やった頼長は彼に向き直り、頬を挟んで首を振るのをやめさせた。

智成の目には薄っすら涙がにじんでいた。それを見つけた頼長はまた笑う。

「大丈夫だ。公春も参る。奴ならば、狩りには慣れているから、そなたも学ぶ所が多かろう。」

「しかし…頼長様。頼長様は何故参られませぬのか。」

「…私は、狩りは好かぬのだよ。齡八つの時に落馬して、死にかけたのでね。だから私は行かぬのだ。」

私と共に歩むのならば、官位がどうであろうと、どのような者とも付き合えるようにならねばならぬ。

今回はそのよい機会だとは思わぬか？」

「うう…」

智成は恨めしげに唸る。

何しろまだ公春のことはよく知らない。

せめて頼長と一緒に行ってくれたら、と彼は思っていたが、どうしようもないことだった。

昼過ぎ、智成と公春、そして一人の少年と数名の従者を伴って狩り

に出た。

この共に狩りに出た男、公春は名を“秦 公春”といい、智成と同じような武官である。

彼もまた、頼長の寵臣の一人であった。趣味は頼長の従者ごっこであり、屋敷の中では本当に従者のように振舞っていた。

「あの…公春殿、よろしく願います。」

出掛けに智成がそっと囁くと、公春はニツコリ微笑んで頷く。

「ええ、こちらこそよろしく願います。私も結構、君の事は気に入っていますからね。」

「そ…それはどうも…、ところで、今日ご同行される方は？」

勇ましく、まさしく狩衣で馬にまたがっている少年を見て智成が囁くと、公春は表情も変えずに言った。

「おや、頼長様より覗いませندしたか？ 四宮様しのみやですよ。まあ、お召し物などはあえて御身分にそぐわない物を召されておりますが…」

「って…まさか…四宮様ってあの…四宮様ですか？」

『四宮』という単語に智成は青ざめた。が、公春は平気な顔で言った。

「ええ、四宮様は四宮様です。雅仁親王様ですよ。お忍びで来られているんです。なんでも、自由に狩りを楽しみたいと頼長様にお願ひされたとか…」

「はあ……」

情報に疎い智成も雅仁親王のことは知っていた。

今上帝の弟君だが、なんでも今様に明け暮れるあまり東宮候補から外されたとか、つい先日元服したが、母君の御所に入り浸りだとか…あまり良い噂は聞かなかった。

「おい、早く参ろう。ところでそちは？見ない顔だが…」

四宮が智成に気がついた。突然視線を向けられた智成はとっさに言葉が出ない。そんな彼を公春はチラッと見やって、また笑顔のまま言った。

「ああ、この者は検非違使府生で宇津智成と申します。左兵衛尉智晴殿の嫡男ですよ。」

「左兵衛尉智晴？知らんな。」

「その方面では有名なお方だったのですが……そうですか、まだ四宮殿はお若いから、興味はございませんか。」

公春が意味深な笑みを浮かべると四宮は眉をしかめた。

「ふん、まあよい。早く狩りに参ろうぞ。」

「はい、承知いたしました。」

四宮は狩りが好きらしい。

最初は公春や智成と行動していたが、始めて一刻ほどたつと二人の従者を従えて、智成たちを置いて山に分け入っていった。

四宮はいつまでたっても狩りの要領を得ない智成と、遠慮をして本気を出さない公春とに業を煮やしたのである。

「いいのですか公春殿、親王様を一人で行かせてしまつて。」

木々の中に消える四宮の背中を見送って、智成が公春を見上げる。
だが公春はいつもの笑顔を崩さないまま、さらりと言った。

「別にいいですよ。四宮様は『自由に狩りを楽しみたい』ということですからね。お一人で行きたいならば、私たちにそれを止めることは出来ません。」

それに、落ち合う時刻と場所は決めているわけですし、従者も連れてくるのですから大丈夫ですよ。

だからまあ、狩りを好かぬものは好かぬものなりに、楽しみましようぞ。ね、智成殿？」

「は…はあ……」

公春はいつもの食えない笑みで若輩の智成を丸め込む。

智成もなんとなく良いような気がして丸め込まれたのであった。

「では智成殿、私は親王の御伴とは別に頼長様よりご命令を頂いております。」

「……な…何ですか、ご命令って……」

やはり読めない公春の笑顔の無表情に智成の背筋には悪寒が走る。

「それは智成殿、私がご多忙の頼長様に代わり展上人とお付き合いて行く方法を、伝授して差し上げよとのことですよ。」

私たちは例え官職は低くとも、頼長様の御側にいる限り四宮様のよ
うな皇族の方や、摂関家の方々と嫌でも関わって行かねばならない
のです。

生憎貴方は父君よりその術を授かっていないと頼長様より伺っております。」

「え…でもいいですよ。私だって検非違使の仕事が…」

「ならばなお更です。今ならば昼夜問わず教えて差し上げられる良い機会ではないですか。さあ、智成殿 始めましょうぞ。」

公春はニツコリと笑って馬を下り懷を探る。

「えーつつつ、今すぐですか？何でそうなるんですかあつ」

悲痛な叫びが森にこだました。

++++
++++
++++

夕刻も迫る頃、ようやく公春は木の根元から立ち上がった。ぐっすり眠り込んでいる智成の肩を叩く。

「智晴殿、お起きください。そろそろ四宮様とお約束の時間ですよ。」

「ん…え…あ…もうそんな時間ですか？」

智成は眠い目をこすって公春を見上げる。

「はい、もうです。まったく、まさか智成殿も和歌が苦手とは思いませんでしたよ。和歌集を開くだけで深い眠りに落ちてゆくなんて…頼長様にそっくりですね。」

「は…あ…ははは。あ、そういえば四宮様は、いかがされたでしょう…、そろそろお待ちの時間ではないでしょうか？」

「おや、すっかり忘れていました。臣下が主君を待たせてはなりませんね。行きましょう。」

公春は智成の手を引いて立ち上がるのを助けてやり、二人は再び馬

に乗った。

しかし……所定の場所で待ったのだが、四宮は全く現れる気配を見せなかった。

「親王様……来ませんね。」

智成は左右を見回して言った。

あたりは静まり返り、風が木々の葉を揺らすばかり……公春も頷いた。

「お迷いになっているのやも知れません。」

「では、私が辺りを探してまいりましょう。」

智成が申し出る。公春は頷いた。

それを見届けると、彼は馬に鞭打って木立の中へ駆け出すのであった。

「四宮様、親王様」

あちらこちらに呼ばわってまわったが、一向に返事はない。

「全く、どこに行ってしまったのだ？このままでは日が暮れてし

まう。」

ぼそぼそと口の中で呟いていると、ヒョウと風を切って何かが飛ぶ音がする。

智成は反射的に振り向いた。

バシユッ

肩にめり込む一本の矢。智成はその反動と衝撃で後ろ様に落馬する。

「射止めたぞ！ 今日一番の大物だ！」

遠くで勝ち鬨を聞きながら、智成は氣を失っていった。

・其之貳・

「命に別状はございませぬ。しかし、傷口が化膿すればもはや我々の手には負えませぬゆえ、一刻も早く医者に見せなければ……この近くの山に名医が居りますゆえ発熱するようでありましたら、すぐに見せてください。」

「そうか、ご苦労。」

地元の薬師に例を言い、頼長は視線を床に臥したかの人に戻す。

傷を暖めるといけないからと、胸から上を布団から出して横たわる人の肩には痛々しい包帯。

薬草の匂いも芳しく、智成は静かな寝息を立てていた。外では虫の声がする。

「智成……」

薬師の去ったのを見計らい御簾が揺れて少年が入ってきた。

智成を負傷させた張本人、四宮こと雅仁親王である。

彼はしばらく立ったまま、彼が入ってきたことを知っていても振り向かない頼長の背中を見つめていた。

が、やがてゆっくりと頼長の少し後ろに腰を落とす。

「こんなつもりじゃなかったのだ。鹿だと思った。よもや智成だとは……」

四宮の静かな、しかし凜と響く声音にも振り返らない頼長の肩は、

微かに震えている。

それに気がついた四宮はそっと頼長の肩に手を置いた。

「もしや…右大将……泣いているのか……」

静かに問いかける四宮の声に頼長はピクリと反応し、次の瞬間

パン

頼長は振り向き様に四宮の頬を叩いていた。

「そうです。私は、私の大切なモノを傷付ける者には容赦はしない。理由が何であれ、です。

四宮殿、もし貴方が皇子でなければ切り捨てているところですぞ。」

「……」

四宮は打たれた頬を庇うことなく、絶句し手を引く。頼長は物凄い剣幕で睨みつけ、低い声で言った。

「今は話しかけないで下さい。」

「わ…わかった……」

やっこのことで言うと、親王はそそくさと部屋を出て行った。

「頼長様……いけませぬ。皇子に手を上げるなど。」

先ほどの物音で眠りから覚めた智成は、布団の上からぱっちりと目を見開き頼長を見つめている。

頼長は四宮に見せていた夜叉の顔をいつもの温和な顔に戻し、智成に向き直った。

「起こしてしまったか…すまない。傷はどうだ？痛むか？」

「ええ、少しは。しかし大したことはございませぬ。薬師の腕が良かったのですね。」

偽りのない智成の微笑に頼長は安堵の息を洩らす。

「しかし、頼長様、この度はご心配をおかけし、まことに申し訳ございませんでした。」

「いや、小鹿が謝る事はあるまい。悪いのは人と鹿の区別もつかぬ四宮殿だ。」

しかしよもや、本当に鹿と間違われるとは…そなたも災難であるな。」

「ええ、まことに。」

頼長の手が智成に伸びる。恐れるようにその指先は、そっと智成の頬をなでた。

「命に別状は無いそうだ。が、医者には見せた方が良かったろう。明日、夜が明けたら山の医者とやらを訪ねようではないか。私も参ろう。」

「……頼長様、結構です。従者と二人で…」

智成が遠慮をすると、頼長は彼を睨みつける。智成は口を噤まざるを得ない。

「私も行くのだ。」

頼長は眉間のシワを一瞬で消し、満面の笑みで智成を覗き込むのだった。

その夜一晩、頼長は智成の枕元で過した。

薬師の予想が的中し、丑刻頃より智成は発熱する。

夜も明けぬうちに頼長は智成を抱えて出ようとしたが、それを秦公春と家司の源俊通が何とか押し留める。

そうしているうち夜明けを向かえ、頼長を初めとする数名は、山の医者の下に向かったのであった。

「思った以上の山道ですね。頼長様、智成殿の容態は…」

頼長の少し前を歩いていた公春が振り向いた。

頼長の腕の中では智成がスヤスヤと眠っている。

「ああ、大丈夫だ。先ほどよりずっと眠っている。」

「熱は体力を奪いますからね。智成殿も疲労しているのでしょう。さて困ったな、道がなくなっている………」

公春は歩みを止めた。先ほどこまで何とか辿ってこられた獣道が、とうとう草陰に紛れ、途切れてしまったのである。別に道を間違えたわけではないだろうが、一同困り果ててしまった。

「やはりあの炭焼きの主人に同行させるべきでしたね。」

「ああ、一刻を争う時だというのに……」

頼長が無意識のうちに齒軋りしていると、草むらが揺れて一人の少女が出てきた。

「お出迎えか遅れ、申し訳ございませぬ。私は、安部文麻呂の娘で、稲女いなめと申します。

父上の命で参りました。貴方様方は右大将殿のご一行ですね。」

「はい、この者が昨日負傷し、発熱しましたので、是非見ていただきたいと……」

公春が応対すると、稲女は進み出て、頼長の腕の中で荒い吐息をつきながら苦しげに眠る智成の額に触れた。

稲女の顔が少し青ざめた。

「熱が高すぎる、早くしなければ手遅れになりましょう。さあ、こちらへ……」

稲女は一刻も早くと頼長を急かす。彼のひじを掴んで、引っ張って歩き出した。

安部文麻呂の家は、すぐ傍にあった。

山の中腹にあるちよつとした広場に作られていて、木々に隠れて離れた所からは良く見えないが、意外と立派な作りになっていた。

「父はすぐに参ります。智成殿をこちらへ……」

指された布団に智成を下ろして、頼長はふと違和感を覚える。

「何故 智成の名を知っている？ 私はまだ一度も言っていないはずだった……」

「昨日より、随分騒いでおられましたから……私の耳にも入ってきましたわ……」

稲女は不可思議な笑みを浮かべると、その場から立ち上がり御簾の向こうに消えた。

入れ違いで入ってきたのは初老かと思われる一人の男。

「さて、見て差し上げましょうかね……」

開いているのか閉じているのか、一目見ただけでは判別できない細い目を頼長から床に伏す智成に移して、老人は頼長と反対側の枕元にどっかりと腰を下ろす。

「いつより熱を？」

「昨夜、子刻よりだ。智成は…大丈夫なのか？」

不安げな視線で訴える頼長を一瞥してから老人は深く頷く。

「この状態があと一刻続いていたなら、目や耳に障害が出ていたかもしれないが、何とか間に合ったようだ。傷を見ても宜しいかな？」

「あ…ああ。」

答えて頼長自ら布団を捲り、智成の胸元を肌蹴させる。

移動により傷が開いたのか、包帯には血がにじんでいた。その包帯を老人は注意深く取り除き、傷を診察する。

「ふむ、思ったよりは化膿していないな。稲女や、化膿止めと解熱剤を持っておいで。」

「はい。」

先ほど姿を消した稲女は、御簾の向こうで控えていたようである。しばらくすると音も無く入ってきて、蛤に入った薬を差し出す。

「水は…」

「…すぐ汲んでまいります。暫しお待ちを。」

一礼して今度は庭の方に出てゆく稲女を見送って、老人が笑った。

「まだまだ要領を得ないようで…何かと手際の悪い娘です。」

「美しい娘だが…そちの娘ではないのか？」

頼長が怪訝に聞くと、老人は頷いた。

「ええ、怪我をして行き倒れている所を見つけて手当てしたのが縁で、すっかり我が家に居ついてしまいました。

今では私の助手として何かと役に立っていますが…やはりまだ不慣れなようで…」

「ふむ。」

頼長は何か思い当たる節があるのか考え込んだ。

そうしている間にも、稲女は手桶に水を汲んで来て、老人の傍らに置くとまた御簾の向こうに消えていた。

「さて、この薬を飲めばたちまち熱は下がります。熱が下がれば、山からも下りられます。それまで、いかがなされますかな。」

老人の問いかけに頼長はしばらく考える。

「そちがよいならば、暫し我々を泊めて欲しい。智成の熱が下がるまでで宜しいので。」

「それが宜しいでしょう。狭い家で何かと不便ですが、それでも宜しければどうぞ。」

「ご好意、ありがたく承る。」

頼長は笑顔で答えた。

・其之参・

「ん…ん…ん…」

微かな唸り声を上げ、智成が目覚める。雨戸が開けられ、東向きの縁側から日差しが彼の顔を直撃したのである。

「智成様、お目覚めですか？」

張りのある少女の声が秋の澄んだ空気を伝わって、彼の鼓膜を振るわせた。

「あ…」

智成は聞き慣れない声に驚き、はっと目覚める。眠気はウソのように飛んでいた。

飛び起きて、声のした雨戸の方を見やれば、薄紅の着物を着た美しい娘が振り向いている。

「どうかなされましたか、智成殿。」

「いや…君…誰？」

訪ねると、少女はクリツとした瞳に一瞬疑問符を浮かべたが、やがて合点がきたと頷く。

「ああ、智成殿はずっと眠っていらしたから…申し遅れましたが、阿部文麻呂の娘で稲女と申します。」

「稲女殿…ですか。ここは？私は一体……」

「私の父、阿部文麻呂の屋敷です。貴方様は矢傷がもとで発熱し、一昨日前に右大将殿の手により、私の父の元に運び込まれたのです。お加減はどうですか？」

聞かれて智成ははっと手を額にやる。

「熱は無いみたいです。気分も悪くない。ところで頼長様は？」

「先ほどまでこの部屋に居られたのですが、一昨日よりの無理がとうとう出まして…今は別室でお休みになられています。」

「……そうでしたか……私としたことが、頼長様にまでご迷惑を掛けるなんて。」

うつむく智成を見下ろして、稲女はクスリと笑った。

「良いんじゃないでしょうか？あの方は、好きで迷惑を掛けられていたみたいですよ？」

「……」

智成は赤面して顔を上げられない。

曲がったことが許せず、彼の基準に合わない者にはとことん冷酷で残忍な態度に終始する頼長だったが、一旦気に入ったものには、とことん尽くし寵するのまた頼長の一面である。

稲女にそれを見抜かれ指摘されたことが、智成にはなぜか少し恥ずかしかった。

「もしもお加減が良いのならば、少々庭を歩きませんか？稲女が案内いたしますよ。」

黙りこくる智成の心中を察したのか否か、稲女は智成を誘う。智成は答えなかったが、稲女は返答を待たずに彼の腕を引き、庭に下りた。

「ああっ、稲女殿。履物も履かずに……」

うろたえる智成を彼女はまたクスリと笑う。

「履物など要りませぬ。この辺りの土は、都の土とは違って朽ち葉が降り積もった柔らかい土です。ね？気持ち良いでしょ。」

「あ…本当ですね。」

「でしょ？」

稲女はニツコリと笑う。智成もそれにつられて笑みがこぼれた。

「ええ。あ、楓があんな緋色に……すっかり秋なのですね。」

「ええ、もう長月ですもの。」

「そうですね。」

二人は顔を見合わせ、そして笑い合う。

「智成殿、あちらにアケビがなっているところを見つけましたの、取りに行きませんか？」

「それは宜しいですね。沢山採って、文麻呂殿や頼長様にも食べていただきましょう。」

「名案ですね、では早速参りましょうか。」

そうして二人は手に手を取って、木立の中に入ってゆく。

それを室内から見ていたのは頼長である。隣で控えていた公春が声をかけた。

「頼長様、さっきから筆がちつとも進んでおりませんよ。」

頼長はハッと気がついて、手元と公春を見比べる。

「……」

「頼長様、小鹿殿が心配なのですか？ 似合いの二人ではないですか。」

苦笑して公春が言うと、頼長は筆を置いて、困ったように言った。

「だからなお更だ。」

頼長は公春に振り向く。

「……智成殿は元服されていると言っても齡十四。まだまだ子供ですよ。頼長様の心配なさるようなことは……」

公春が苦笑すると、頼長は一層厳しい顔で言う。

「公春、私が幸子を娶ったのは幾つの時だ？」

幸子とは、頼長の正室のことである。公春は暫し考えて言った。

「…十四…でしたか。しかしそれは父君に申し付けられてのことでしょう？」

「だか、そういうこともありえる…という事だ。智成は私の舞人、それが何を意味するか…それが分からないそなたではないだろう。」

「頼長様は、稲女にご不満のようですね。」

公春は相変わらずの笑みで言った。が、その瞳には智成に対する時には無い 探るような妖しい光が灯っている。頼長はそれをさらりとかわして答えた。

「ああ、何か引つかかるのだ。恋の相手に身分をどうこう言うような野暮なことはしないが…どこの馬の骨とも分からぬ女に折角仕込んだ舞人を寝取られても面白くない。公春、すこし阿部文麻呂と稲女について、探りを入れてくれないか？」

「分かりました。御心のままに…。」

公春は間者さながら音も無くその場から消える。残った頼長は一人、誰もいなくなった庭を見つめて呟いた。

「智成よ…身分は低くともそなたは官吏…身分違いの恋は辛いぞ…」

と。

その頃、当の智成と稲女はアケビ採りに夢中になっていた。稲女は木によじ登り、下で待つ智成に声をかける。

「智成殿、何故上ってこれられないのですか？」

「そ…そんな、そんなことはございません。そなたが上っているから、私が上がれないだけです。」

プイっとそっぽを向くと、稲女は横枝に移ってまた声をかけた。

「ほら、私がこちらにどきましたから、智成殿も上れますよ。」

「し…しかし、私も上ってしまったては、下で誰もアケビを受け取れないではないですか。」

智成は真っ赤になって反論する。稲女はクスッと笑うと仕方が無いと蔓に生ったアケビを取り始めた。

「分かりましたよ。では私が落としますので、智成殿は受け取ってください。」

落ち葉に埋まってしまうと、もうどこだか分かりませんから、ちゃんと受け取って下さいよ。」

稲女が一つ放ると、智成は慌ててそれを受け取る。

「うわ、美しい色ですね。」

「ほら、ぼーっとしてないで、次のも落としますよ。」

「うわあっ。」

今度は別の場所に放る。稲女はわざと智成を右往左往させているように、あちこちに実を落とす。

両手で持って一杯ほどのアケビを取って、智成は散々走らされて根元で荒い息をついていた。

稲女は上っていた木の少し高い所から飛び降りて、そんな智成を見て笑った。

「貴方、検非違使でしょ？そんな事で息が上がっているなんて…物取りなんて出来ないでしょうに。」

「だ…だって…足場が良くないから…都の道路は平らだから…」

「それもそうでしょう。だけど…それじゃあ“小鹿”の名が泣きますわ。」

智成は一瞬何を言われたか理解できなかったが、やがてその意味が分かってくると、また頬に血を上らせる。

「な…なんで、その名を知っているのですか？まさか頼長様から…」

彼が恐る恐る聞くと、稲女はひどく笑い転げ始めた。

「違います。右大将殿からは何も聞いておりませんよ。」

さあ、次ぎ行きましょう？木の上から、この近くに栗の木があるの

が見えましたわ。山葡萄も見えましたから。」

「う…うわっ」

稲女に急かされ、智成はよろける。彼は非常に丸め込まれやすい。そうして稲女に誤魔化されたまま二人は更に山の奥へと分け入っていった。

・其之肆・

「ほう、これは凄いな。智成殿と稲女殿が採ってまいられたのか。」
頼長の家司、源俊通は玄関に山積みになれた山の幸を見て言った。
二人は夕方近くになってようやく帰ってきたのである。

「おお、これは見事な松茸だ。それに葡萄にアケビに…栗まである。」

俊通が騒いでいると、公春が玄関から入ってきた。

「公春殿、今お帰りか。見てくだされ、この見事な松茸。智成殿と稲女殿が採ってまいられたのだ。これは夕飯が今から楽しみだ。」

ホクホクしている俊通をまた意味深な視線で見つめてから、公春は笑顔を作って言う。

「おお、確かに素晴らしい松茸ですな。今宵はその美味なる味に酔いしれましょうぞ。」

言うど、彼は一礼して上がってゆく。それを見送った俊通はなんとも言いがたい表情をしてから一人ごちる。

「……公春殿が言うど、どうも妙な感じになる…」

「そうでしょうか？」

智成が呑み込めないで首をかしげていると、奥から文麻呂翁が出て

きた。

「稲女や、随分遅かったではないか。どこまで行って来たのかね。智成殿は怪我をなさっているのだぞ。頼長様が心配しておられたぞ。」

「そ：そう言えば智成殿、傷の具合は如何ですか？」

考え込んでいた俊通も聞いてくる。智成は曖昧に笑って言った。

「稲女殿が私を温泉に案内してくれまして：随分楽になりました。今ではすっかり痛みも取れて。」

「おお、稲女。智成殿をあの特湯に案内して差し上げたのか。」

文麻呂翁が身を乗り出す。稲女は大きく頷いた。

「はい。丁度近くまで行きましたので。」

「そうか、そうか、あの湯に入れば傷もたちまちのうちに治る。ほれ智成殿、見て差し上げますのでこちらに来なさい。」

稲女や、採ってきたものを台所に運んで、夕食の準備をしておくれ。」

「はい、父上。」

智成は翁について部屋に戻った。座らされて上半身肌脱ぎになる。そこを翁が包帯をそっと取り除いた。

「おや、巻き方が違っている。」

取りながら翁がボソリと呟くと、智成はギクリとした。が、それに気づいてか気づかないでか、翁はどんどん包帯を取って行った。

「見なされ、智成殿。傷がすっかり治っている。」

「えっ、嘘。」

慌てて肩を見ると、今朝まであった痛々しい傷は殆ど消えている。

「すごい…嘘みたいだ…」

「あの湯は効きますのでな、どんなに酷い傷でも瞬く間に消えてしまいます。」

ただ、あの場所自体が神聖だから効き目があるのであって、湯を持ってきて入っても何の効果も無いのが難点じゃが……

しかし油断は禁物ですぞ。あと二、三日は泊まっていきなさい。」

「はい。お言葉に甘えさせて頂きます。」

老人はまた智成の肩に薬膏を塗り、包帯を巻いていった。

丁度その頃、別室では公春が主人に報告していた。

「頼長様、阿部文麻呂と稲女について、調べてまいりました。」

「……随分早かったな。」

「このくらい、何でもありません。で、阿部文麻呂に関してですが、彼は蝦夷の末裔です。が、きちんとした宇治の領民で、以前は官吏もしていたようです。」

頼長が始めて書物から顔を上げた。

「ふむ。で、稲女は？」

「彼女は戸籍に載っていませんでした。この近くに『稲』という奴婢と『猪女』という女がいますが、どちらも該当しません。本人に会って、確かめて参りました。」

「ふむ…ご苦勞であつた。」

公春は一礼して下がる。

（蝦夷に素性の分からぬ女…か、思いがけず面白くなってきた。）
と、頼長は一人物思いにふけるのだった。

その夜の食卓は、非常に豪華だった。

栗飯や焼き松茸、それに麓より頼長の父 知足院の使者が干し鮑や高菜、そして大量の酒を運んできたのである。

智成の快気祝いと称して、宴会は言うまでもなく使者も巻き込んでの大騒ぎとなる。

智成は若干酔った稲女に酌攻めに遭って、辟易していた。普段大人

しそうな俊通は半裸になって文麻呂翁と一緒に踊っている。

そんな喧騒を頼長は一人避けて、縁側に徳利と杯を持ち出して、月を見ながらちびりちびりとやっていた。

「頼長様、ここでしたか。お姿が見えないから…探しましたよ。」

一人で飲んでいた頼長を公春は目ざとく見つけて、自分も徳利と杯を持ち出してきた。

「なんだ、公春も出てきたのか。」

「隣…宜しいでしょうか。」

「ああ。」

答えて頼長はまた月を見やった。

「頼長様…そろそろ下に戻られた方が宜しいのではないですか？幸子様が寂しがっておられます。」

他の側室様方は子供が可愛い盛りで良いですが、幸子様には居られませんから…」

「……幸子には菖蒲麻呂あやまろを養子にやったではないか…」

頼長が反論すると公春が首を横に振った。

「いいえ、菖蒲麻呂様は生母の知子様の元におられます。」

「……」

黙り込んで杯を煽る。空になったのを見計らって、公春はなみなみと注ぎ足した。

「今は、幸子の…いや女の事は考えたくない。公春…お前は一体…誰の味方なのだ？」

その杯を一気に煽って頼長はじろりと公春を睨む。が、公春はいつもの食えない笑顔でさざりと言った。

「私は頼長様の味方ですよ。」

「……そういえば、智成はどうした。」

頼長は睨んだ顔のまま聞く。

「先ほど稲女殿が酌攻めにしていましたよ。」

「……」

睨んでいた顔を益々渋く歪ませて、頼長は手酌で酒を煽った。

「だから頼長様。貴方の小鹿は放っておきなさい。どうせ彼は泣きを見て、帰って来るのですから。」

鹿は鹿で、官吏は官吏で、それぞれ楽しめばいいのです。さあ、もう一献、どうぞ。」

「…公春、一体何を掴んだ。お前の言っていることが分からない。」

頼長が膨れると、公春はまたクスリと笑って主人の耳元に口を寄せ
る。

「今は、言えません。今の貴方は飲みすぎていますから。」

教えてもらえるのかと期待した頼長は、また膨れて公春に背を向け
るのだった。

・其之伍・

「あ…頭…痛い…」

差し込んだ朝日に照らし出され、智成は苦しげに唸った。

「大丈夫ですか、智成殿。」

昨夜からずっと彼の傍を離れていない稲女が水を差し出す。

「う…あ…稲女殿。気分が悪いです。一体これは……」

「二日酔いですよ。もしかして、お酒…飲んだことなかったですか？」

智成は首を左右に振るが、すぐに偏頭痛に襲われたらしく、頭を抱え込んだ。

「いいえ、始めて…という訳ではないのですが…飲み慣れないもので…」

「そうでしたか…昨晚は随分勧めてしまい…申し訳ありませんでした。」

稲女はしおらしく俯く。その様子に慌てたのは智成だ。

「い…いえ…私がつい飲みすぎてしまったのですから、稲女殿が謝られることはございませんよ。」

「…そうでしょうか……」

顔を上げようとしないう稲女にどうして良いか次の言葉を智成が考えていると、御簾の向こうから翁がやってきた。

「稲女、ここにいたか…すまんがそろそろ朝の準備をするので、下に行って水を汲んで来てもらいたい。」

「あ…はい。」

稲女は言われたとおりに立ち上がる。それを見た智成も、頭痛に耐えて慌てて彼女の後を追った。

「私も参ります。」

「……」

稲女は振り向き智成を見つめる。しばらく黙っていたが、口元をほころばせて言った。

「そうですね。閉じこもっているよりは、動いていた方が気分も晴れましよう。」

この屋敷の水汲み場は、庭を右手に折れたところより続く獣道をしばらく下ったところにある。

そこは美しい清流で、時折跳ねる魚は岩魚か鮎か、舞い落ちた川面の紅いもみぢ葉が錦を織り成している。

空は青く澄み渡り、風は凜として涼やか、朝露に草も青く輝き、景色は枯れ果てる冬を前に最後の輝きを見せていた。

「昨日参った所も美しかったですが…ここも美しいですね。」

「ええ、私はここを気に入っていますの。智成殿にも気に入っていただき、光栄ですわ。頭痛…大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。この美しい景色を見ていたら、そんなことも忘れていました。」

「美しい…そうですね。」

手桶を傍らに置き、稲女は深呼吸して瞼を下ろす。

「人と契らば 濃く契れ 薄き紅葉も 散れば散るもの」

「え…」

智成はおどろいて稲女を見る。彼女は見られていることに気がついて、振り返った。

「何でもございません。さあ、水を汲んで帰りましょう。父上も朝の支度が出来なくて困っているでしょうから…」

憂いの表情を一掃し、稲女は元気良く岩を伝って水を汲む。智成も聞き違いだったかと表情を戻して後を追った。

「手桶は私が持ちましょう。私も検非違使、そのくらいの力仕事は出来ますゆえ。」

「あら、まだ根に持っていたのですね。」

稲女は彼がまだ昨日から鹹からかった事を覚えていたのに苦笑する。そして手桶を差し出した。

「では、お言葉に甘えましょうか。」

道々話し帰りつくと翁が出迎える。

「稲女待っていたぞ。おや、智成殿に持たせて。すまないなあ、智成殿。」

手桶を受け取って翁が恐縮すると、智成は自分の言い出したことだからと首を振る。

「では智成殿は向こうでお待ちください。稲女や、手伝っておくれ。」

「はい、父上。」

稲女が櫓たすきをかけて行ってしまうと智成は居場所をなくしてしまって、部屋に戻る。

部屋には饗宴の跡に頼長と公春が待っていた。

「おや、出ていたのですか？」

いつもの絶やさない微笑で公春が問いかけてくる。

「ええ、稲女殿と下の小川に水汲みに参っていました。」

「……」

頼長は不貞腐れた様にそっぽを向いていたが、やがて懷から筆と紙とを取り出すと、物凄い勢いで書き付けて「ん」と智成に押し付けた。

そうしてニヤリと笑うと公春と智成を残して庭に降りる。紙には次のような文句が書き付けてあった。

『秋山戚戚葉零零　　（秋山は戚戚　葉は零零）』

麋鹿鳴音数処聆　　（麋鹿の鳴音　数処に聆^きく）

勝地尋来遊宴処　　（勝地尋ね来たりて遊宴する処）

無朋無酒意猶冷　　（朋無く酒無く　意猶冷し）

漢詩に智成が困っていると、公春が後ろから覗き込む。

「おや、これは管公の詩ではありませんか。ふむ……」

「頼長様が何故私に管公の詩を？」

理由が分からない智成は尋ねる。公春はしばらく考え、やがて智成を見る。

「分かりましたよ。全く…素直じゃないんだから。こんなに捻った

ら、智成殿には伝わらないでしょうに：

まあ、まだ詩自体を書いてきたところが救いですが：

「え、どういう事ですか？」

公春の独り言が分からない智成は戸惑いを隠せない。

「ご自分で考えなさい。と言いたいところですが、智成殿にはまだ教えていないところです。」

「はあ…」

「“奥山にもみぢふみわけなく鹿の”の歌はご存知ですか？」

公春はにっこりと笑って言う。智成は、漢詩の話をしていたのに何故和歌が出てこなければならぬのか分からない。それでも何とか記憶を辿って歌を思い出す。

「“奥山に もみぢふみわけ なく鹿の 声聞くときぞ 秋はかなしき”でしたっけ？」

「そうです。この歌は古今集の四巻、秋に読み人知らずとしてあります。」

公春は満足げに頷いた。智成は間違っていなかったと胸をなでおろす。

「しかし、その歌が管公の漢詩と何の関係があるのですか？」

智成が首を傾げる。公春は人差し指を、智成の顔の前に立てる。

「大有りですよ。先ほどの漢詩はこの歌を元に作られたものなのです。」

「はあ…」

生返事を返す智成に焦れてか、公春は人差し指を智成の鼻先に押し付けた。

「頼長様は徹底的に和歌嫌いですからね。」

恐らくは“奥山に”の方の歌を智成殿に差し上げたかったのでしょうが、それでは癪なのでそれを元に作られた漢詩を送られたのでしょう。“なく鹿”は稲女殿を追ってばかりの智成殿。更に管公の“勝地尋来遊宴処”を昨日の宴に掛けているのでしょう。」

智成は哑然と公春を見つめた。

「“友無く 酒無く 意猶冷し”？」

公春はこっくりと頷き

「酌をさせて頂いていた私にとっては、甚だ不本意ですが…」

と付け加える。

聞くなり智成は部屋を飛び出し、庭の頼長に駆け寄った。

「頼長様！」

叫んだはいいが、後が続かない。困っていると頼長がゆっくりと振り向く。

「小鹿…稲女が好きか？」

「え……」

智成はその眼差しにうろたえる。頼長は再び聞いた。

「小鹿、稲女を好いているのか。」

「…稲女殿は良くして下さいますゆえ。」

智成の脳裏に“奥山の”の歌が蘇る。

“なく鹿”を智成に例えた頼長、「好き」の意味が、自分の回答とずれているのを分からない智成ではない。

彼は首をブンブン左右に振って、もう一度回答しなおした。

「…稲女殿は好きです。けれど、それが恋かどうかは…私には分かりません。」

「…私の目から見れば、お前はまるで恋する牡鹿に見えるがな…」

「……」

また絶句する智成。静寂が二人の間に流れる。

それに終止符を打ったのは頼長だった。

「今日中にも我々は山を降りることになった。呼び出されたのだよ、宮中で問題が起こったらしい。」

「え…では」

「そうだ。これから当分、宇治に来る予定は無い。お前さえ望むならば、稲女を公春か俊通の養女にさせよう。」

その言葉に、智成の頬に紅が注す。

つまりそれは、稲女をそれ相応の身分にして、智成の嫁に迎えられるということだったのだ。

「どうだ、智成。そなたは私のように官位に縛られ、妻を押し付けられることも無いのだ。もし稲女を好いたのならば……」

「公春殿、何が楽しいのだ？」

御簾越しに庭の喧騒を見ていた公春に、俊通が声をかけた。

「おや、私は楽しそうにしていましたか？」

公春はいつもの表情のまま俊通を見る。俊通は頷いた。

「ああ、随分楽しそうだったぞ。」

「そうですか。確かに楽しいですけど…それが顔に出てしまっていたならば、私の修行不足ですね。」

微かに眉をひそめる公春に、俊通は首をひねる。

「庭に見えるのは…頼長様と智成殿か。一体何があったのだ？」

「頼長様のお手並みを、拝見させていただいてただけですよ。」

公春がさらりと言うと、俊通はぎょっとして御簾に張り付いた。

「手並みて…頼長様がとうとう智成殿をか！そうか…智成殿もいよいよ…」

「残念ながら違いますよ。早合点されては困りますな、俊通殿。まあ我々には関係ありませんけど。」

公春はきびすを返した。

一人残された俊通は御簾に張り付いてまだ外を見ていたのだった。

・其之陸・

「お話とは何でしょう、智成殿。」

智成は昼過ぎに稲女を呼び出した。場所は今朝の清流である。

智成は頼長と話してからずっと一人部屋にこもって考えていた。その結果がとうとう出たのだ。

相変わらず空は青く、水はとめどなく流れる。しばらくの沈黙の後、智成は意を決して口を開いた。

「今日中に山を下りることになりました。頼長様が呼び出されましたゆえ……」

「そうですか……もう少しいてくださると思っていたのに……名残惜しゅうございます。」

稲女は寂しげに言った。智成は梢の紅葉を見ていたが、やがて稲女に向き直る。

「稲女殿、いきなり本題に入るが……もし宜しければ、稲女殿がもし宜しければ……」

「私がよければ……何でしょう？」

智成は感極まって稲女の手を取った。稲女はそんな智成の切羽詰った様子に少々引き気味である。

「稲女殿が宜しければ、私とともに都に参っては下さらぬか。」

「え、都へ？」

突然の申し出に驚いたのは稲女である。彼女は全く予想だにしていなかった。

「そうです。都です。私と一緒に来ては下さらぬか。」

「駄目です。私は都には参れません。」

即答した稲女に智成は食い下がる。

「どうしてですか？智成と都に参っては下さらぬか。私は貴女を好いております。貴女を…」

「駄目なものは駄目なのです。私は…都へは参れませぬ。」

稲女は俯いた。

「どうしてっ！」

智成の悲痛な声が静かな木立の間をこだまする。

「人と契らば 濃く契れ 薄き紅葉も 散れば散るもの…かつて私にそう申した人がおりました。」

「今朝もそのようなこと、申しておりましたね。その方が都に居られるから…」

智成は手を離さない。稲女の眼に涙が浮かぶ。

その時だ。草むらがガサゴソなって、二人の前に一人の男が現れた。

「おや？声がすると思ったら智成ではないか。」

「…四宮様？何故ここに？」

現れたのはかの人、四宮 雅仁親王である。彼はまだ麓にいたはずだったのだが・・・

「ん？暇つぶしだ。使者が右大将たちが随分楽しんでいると報告してきたから私も出迎え隊に混ざることにした。」

「親王が出迎えなんて聞いたことございませんよっ！」

「…堅いコト言うな。そんなに融通が利かないと、頼長みたく言われるぞ。ん？智成、そっちの娘は？」

四宮に視線を向けられた稲女はなぜか着物の袖で顔を隠し、智成の後ろに隠れるようにする。

しかし智成はここで公然と親王に認めてもらう魂胆か、ここぞとばかりに稲女を前に押し出した。

「私の妻としたい人です。名を稲女と申しまして…」

「智成殿！」

稲女が彼を止めようとした拍子に顔が見えた。四宮がその顔に反応した。

「ふむ、智成の…ねえ。おや？それに見えるは…菊若ではないか。どうしてお前がここにいる？」

「っ……四宮殿、また貴方にお会いするとは……」

稲女は四宮を睨みつける。

「菊若、お前は…父上の所にいたのではなかったのか…」

「……貴方には関係ない。」

稲女は今までには無い冷たい視線で四宮を見据える。

しかし、握り締めた手が小刻みに震えているのを智成は見つけてしまった。

「四宮様、稲女殿…一体どういう事ですか？菊若って…」

稲女は唇を噛んで顔を背ける。

「智成はお前を嫁に迎えるつもりだったのか…ならば、真実を伝えねばなるまい。いいな、菊若。」

四宮に促され、稲女は頷く。それを確認してから四宮は従者たちに先に行くように指示した。

「さて…智成。そなたが求婚したこの者は、私の知る限り私の父鳥羽上皇の稚児 菊若。

生まれつきともいえる舞の天才で、齡三つの時に稚児に上がった。

その時よりわが国随一の舞人となるべく昼夜を問わず父のそばに置かれ、齡十一で奥義までも皆伝したと…」

「で…では…稲女殿…いや、菊若殿は…」

智成は泣きそうな顔で四宮と稲女見比べた。見つめられた稲女はとうとう重い口を開く。

「そうです。稲女は仮の名…左大臣源有仁が庶子、菊若。鳥羽上皇の稚児おのこにございました。

私は男…それ故智成殿の申し出、受けるわけには参りません。」

「そんな…では…先ほどの言葉は…」

「人と契らば 濃く契れ 薄き紅葉も 散れば散るもの…そう私に申したのは上皇でございました。

あのお方は、私が奥義を皆伝するとしばらくして私に飽いたのです。主に捨てられた稚児ほど惨めなものはございません。私は、誰も知らない所で死のうと思ひ早々に都を去りました。しかし…」

「結局死にきれず、怪我をして行き倒れ、阿部文麻呂の元に素性を隠し、娘として住み着いたのか。」

従者の消えた先から現れたのは頼長その人。もちろんいつものように公春を従えている。

「…右大将殿……」

菊若は振り返った。

「葉月の初め、元服を控えた上皇の稚児が姿を消した。

その稚児の着物が我が父、知足院の宇治の領地で見つかり、上皇は我が父にその稚児を骸でも良いから見つけろと仰った……

まさか、その稚児が稲女だったとはな……四宮殿の従者に聞いてここに参った。私が鳥羽院別当とはいえ面識が無い故、分からなかったぞ、菊若。」

「……」

菊若は俯く。

「菊若、父上はお前を探している。都に戻ろう。」

四宮が、菊若の肩に手を置いて、覗きこむと菊若は邪険に振り払った。

「嘘だ、もう遅い。菊若は死んだのだっ！ここにいるのは稲女、阿部文麻呂の娘で……」

叫ぶ菊若に、見かねた頼長は公春に合図する。公春はなぜか智成を捕まえて刀を抜き、その首筋に刀身を当てた。

「……！」

「ど……どうされましたか、右大将殿！」

慌てたのは菊若と四宮である。刃を当てる公春もこの時ばかりは笑顔を引っ込めた。

頼長は菊若に近付き、彼の胸倉を掴んで聞いた。

「選べ、菊若。お前と智成は背格好も同じ。お前が菊若を殺し、稲女として生きるのならば、私はこの場で智成を殺し、その骸を骨にしてお前の代わりに上皇に献上しなければならぬ。都に帰るか、帰らないか、どっちだ！」

「……」

菊若はチラリと智成を見た。恐怖に慄いているかと思われた智成の表情は、意外にも穏やかなものである。

「智成殿：どうして、そんなに落ち着いているのです…」

思わず聞くと、智成は真剣な顔で答えた。

「私は、己が主 頼長様を信じておりますゆえ、主の処遇ならば、死すら怖くありません。」

「主の処遇ならば：では例えそれが追放や死であっても：ですか？」

菊若は何か答えを探るように聞いた。

「はい。それが主の御心ならば…」

智成ははっきりと答えた。

菊若は眼を伏せる。そしてしばらく黙った後、頼長を真正面から見据えた。

「帰りましょう、都へ。」

・其之漆・

宇治より右大將が帰って、一ヶ月が過ぎた。暦は長月から神無月へと変わり、季節は秋から冬へと移る。

宮廷内では特に何もなく、智成は相変わらず検非違使府生だった。

「小鹿殿、小鹿殿！一大事だぞ！」

静かに文章を作成していた智成の元に府生仲間の『甘条殿』こと春日利親がいつものように滑り込んでくる。

「何ですか騒々しい……」

煩げに智成が眉をひそめると、利親はバンと机に手を突いて、ヌツと顔を突き出した。

「新しい上司が来る。元服したての坊ちゃんらしいが、容姿端麗でその上、舞は宮中一の腕前。」

「ふーん……」

智成は興味なさげに聞き流す。彼にとって上司が誰になろうがあまり関係ないことであつたからだ。

「おい、もうちょっと興味を示せよ。しかも元服前は上皇の寵童だったらしいぜ。」

「私には関係ありませんから……」

そう言っていると、戸口の方が騒がしくなる。大尉殿がひょっこり顔を出し、続いて若い官吏が出てきた。

どうやら新米の“上司”に大尉殿が案内しているようである。

「おお、ちょうどいい。ほらアレだぜ。新しい上司って…」

利親に促され智成が顔を上げると、丁度その新米上司と眼があった。向こうも智成に気がつくのと、大尉殿もそっちのけで新米上司は一直線に彼のもとに来る。

「え？」

声を上げたのは利親だ。智成はぽかんと口をあけている。新米上司はにっこり笑って言った。

「久しいですね、智成殿。本日より検非違佐に任官された源敦雅あつまさです。その節はお世話になりました。」

智成は、最初はわからなかったが、やがて開けていた口が更に開く。思わず利親を押しつけて、敦雅を指差した。

「えっ…も…もしかして…稲女殿…じゃなくって、菊若殿？」

「はい、元服して敦雅と名を変えました。これから立場は上となりますが、仕事以外では以前と同じ付き合いをしてくださいね。」

「え、ええ、もちろんです。稲…じゃなかった。敦雅殿さえよければ、是非。」

智成の返答に、ホッとした表情を見せて、敦雅は握手をと手を差し

出す。智成はしっかりとその手を握る。

「よかった…もし覚えていてくださらなかったらどうしようかと…私も随分不安だったのですよ。」

「いや、髪形も変わったし、身なりも変わったし、それに随分男らしくなったから…ちよつとわかりませんでしたよ。」

「嬉しいな、男らしくなった。だなんて…貴方様に言われると。」

敦雅は頬を染めた。智成も微笑む。ついていけないのは大尉殿と利親である。

「お…おい！どうして小鹿殿と検非違佐殿が知り合いなんだ？さっぱり分からん。」

感動の再会ムードの中、すっかり存在を忘れ去られていた利親が二人の間に割って入る。敦雅が笑ってそれに答えた。

「実は、元服前に智成殿には随分お世話になりましたね。」

「な…なにいつ？」

眼を白黒させている利親に敦雅は更に追い討ちをかけた。

「智成殿からは求婚もされていまして…」

「わっ、わっ、わぁっ！」

奇声を発して語尾をさらったのは智成、だけどその言葉の主旨は既に皆に伝わってしまっていた。

新任検非違佐と府生のやり取りに耳をそばだてていた噂好きの案主たちは、左右の者と激しく意見交換を始める。その様子を魂の抜けた様子で見つめる智成……

「どうしてくれるんですか…敦雅殿……」

「小鹿殿…人の噂も七十五日…がんばって耐えなされ」

敦雅がポンと智成の肩を叩き慰める。しかし智成はストンと腰を落とし、床にペツタリ座りこんで叫ぶのだった。

「これから私は、どうすればいいんですかぁっつつっ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4693f/>

むべやまかぜをあらしというらむ

2010年10月10日04時34分発行